# さわる展示の実施と課題

# - 「ケレ ヤン、ヌカラ ヤン、ヌ ヤン さわる、みる、きく、 国立アイヌ民族博物館」を通じた実証的検討 -

The Implementation and Issues involved in Tactile Exhibitions: The Exhibition "kere yan nukar yan nu yan (touch, look, listen) to the National Ainu Museum"

# 立石信一(TATEISHI Shinichi)

国立アイヌ民族博物館 学芸主査(Senior Fellow, National Ainu Museum)

# 今野彩(KONNO Aya)

国立アイヌ民族博物館 エデュケーター(Educator, National Ainu Museum)

キーワード:さわる展示、ユニバーサル・ミュージアム、音の展示、ハンズ・オン、点字、フィールドミュージアム

Key Words: Tactile Exhibition, Universal Museum, Sound Exhibition, Hands-on, Braille, Field Museum

#### 1. はじめに

国立アイヌ民族博物館(以下、当館とする。なお、必要に応じて〈博物館〉と記す)の交流室で2021年8月21日から10月3日まで「ケレヤン、ヌカラヤン、ヌヤン さわる、みる、きく、国立アイヌ民族博物館」(「付録:開催概要」参照)を開催した。本来であれば2020年の同時期に開催する予定だったが、新型コロナウイルスの感染拡大により開館が延期される中、本展も一年延期され開催されることとなった。

本展は、展示している資料にさわることによって、 見ることだけではわからない資料の特徴やその本質に ついて知る機会とし、そうした体験を通して博物館の あり方を問い直すことを目的とした。したがって、本 展では、直接的に資料にさわること以外に、音を聞く こと、あるいは民族共生象徴空間(以下、ウポポイと する)について理解を深める行為などは「触れる」に 含意させる。

本稿ではまず近代的な博物館とハンズ・オン展示の 歴史的経緯をまとめた上で、当館の基本展示室におけ る現状とさわる展示の状況について概観する。そして、 こうした点を踏まえて、当館でさわる展示を実施する 意義について検討を加える。その後、本展に向けて計 画、実施した内容について整理し、本展について考察 する。最後に本展の課題を踏まえ、今後の展望につい て言及することでまとめとする。 なお、本稿では直接的な接触を伴う場合は「さわる」を用い、より広義の場合は「触れる」を用いることとする。また、本論については立石が、「付録:開催概要」については今野が執筆を担当した。

- 2. 開催にいたる経緯と基本展示室における展示状況
- 2.1. 歴史的な博物館の位置づけとハンズ・オン展示の展開

ヨーロッパにおける博物館の祖型といわれるような施設と、近代以降の博物館との大きな違いの一つとしてあげられるのが、一般に公開することであった(今村 2017:29)。それまでの施設は一部の階級の人々の間だけでのものだったが、近代的な博物館は「あらゆる人々(市民たち)に公開される民主的な施設として」(大堀 1997: 44)運営されたのである。そうした近代的な市民社会の到来に対応する形で形成された博物館は、より多くの人々に公開する目的のため、効率的、合理的な鑑賞方法がとられるようになっていった。すなわち展示する資料をケースの中に入れることによって、来館者が視覚によってのみ展示を理解することができるようにしたのである。

「ミュージアムという装置は、その成立時から、人間のさまざまな感覚の中でも視覚だけを特権化するかたちで営まれて」(吉田 2021: 4) きた、あるいは「博物館・美術館は、視覚優位の近代社会を象徴する『見

せる/見る』文化施設 | (広瀬 2016: 13) と言われる ほど、来館者が見ることを通して博物館体験をするこ とが前提とされている。国立民族学博物館の吉田憲司 館長は、同館の特別展「ユニバーサル・ミュージアム ―― さわる! "触"の大博覧会」に寄せた文章の中 で、「博物館、美術館の原型は、16、17世紀にヨー ロッパの王侯貴族が競って築き上げた驚異の部屋、珍 品陳列室」であり、「そこでは、常にコレクションを 見せることに意義が求められした。「西欧近代という のは、視覚を特権化した時代であり、博物館・美術館 はその申し子ということになる | (吉田 2021: 4) と 述べている。そして、大英博物館やルーブル美術館が 開館した時代に「手を触れることなく展示物を見ると いう習慣」(吉田 1999: 27) がすでに成立していたと いう。また、博物学とは「一八世紀のヨーロッパが編 み出した新たな世界認識の方法が、ものをその本来の 意味から切り離し、目に見える特徴だけを基準にして 分類し、並べ、整理する」(吉田 1999: 20) ことも指 摘している。

このような成り立ちをもつ博物館にあって、視覚情 報だけに頼らない展示の鑑賞方法として開発された のがハンズ・オン展示であり、その手法は、1960年 代半ばのボストン子ども博物館からだとされている (渡邉 2016: 171)。しかし、科学館においてもハン ズ・オン展示の試みがなされてきたとされており(渡 邉 2016: 171; 仙波・小川 2000)、ハンズ・オン展示 は 1925 年のドイツ博物館 (ミュンヘン) や 1937 年 の発見博物館 (パリ) の延長上にあるものだという (コールトン 2000: 6)。また、理工系の博物館での取 り組みによって、ハンズ・オン展示のみならず、「『も の展示』から『こと展示』への変化」(大堀 1997: 107) も引き起こしたと言われている。両者から出発 したハンズ・オン展示は、定義は一定ではないものの、 程度の差はあるが教育的効果を目的とした展示手法で あるといえる。そして、教育を主たる目的とする子ど も博物館において積極的にハンズ・オン展示が試行さ れてきたことからもわかるように、対象が子ども向け の教育とされることが多いのも特徴と言える。

#### 2.2. 当館の展示概要とさわる展示について

当館では、ユニバーサルデザインやバリアフリーという観点から、展示室内外におけるハード面の整備が進められてきた。こうした取り組みについては、「国立アイヌ民族博物館展示計画」(平成28年5月文化

庁)において、「展示の特色」で「ハード・ソフトの両面からユニバーサルデザインに配慮し、あらゆる人に開かれた展示環境を実現する」(文化庁 2016)とされている。展示室内については車椅子ユーザーの利便性から、資料の高さ、動線の幅などが検討された。また、展示室内に点字解説はないものの、貸し出し用の音声ガイド機は整備されている。その一方で、グラフィックカラーについてはカラーユニバーサルデザイン化がさらに必要な状況である。

次に、当館の基本展示室における資料の展示状況を概観する。基本構成である6つの大テーマによる展示(以下、6テーマ展示とする)とそれを総覧的に見学できるプラザ展示においては、資料の多くが展示ケースに入れられておりさわれる展示とはなっていない。一部、露出展示を行ってはいるものの、これらに関してもさわることはできない。他方で、「私たちのことば」コーナーでは、アイヌ語を聞けるよう映像資料が展示されている。また、各テーマの展示スペースには映像モニターが設置されており、そこでは映像に合わせて、音声による解説を聞くことができる。ただしタッチパネル式の映像モニターが多く、映像を選択して視聴するようになっており、視覚障害者のアクセシビリティという点で課題が残る。

上記6テーマに加えて、基本展示室内には探究展示テンパテンパというコーナーが設置されている。テンパテンパはアイヌ語で「さわってね」の意味であり、文字通り資料にさわることができる。また、探究展示という名称が付いているように、探究的な理解を深めるための展示として組まれており、教育型の展示といえる。

以上のような展示構成となっているが、開館当初から新型コロナウイルスの感染拡大予防対策の一環として、タッチパネル式の映像モニターについては、現時点では自動ループ再生可能なもののみ運用している。 一方で、音声ガイド機や、探究展示 テンパテンパなどの来館者の直接的な接触を伴うものは運用を制限している。

# 2.3. 開催の経緯とコロナ禍におけるさわる展示の扱いについて

本展は当館が開館する前の2018年頃から準備を進めてきた。開館する2020年は、東京2020オリンピック・パラリンピックの開催年でもあり、パラリンピックの期間に合わせて、視覚情報中心の基本展示室

を体験することが困難であると考えられる視覚障害者が、直接資料にさわることによってアイヌ文化や当館を体験することを目的として、本展が発案された。したがって初期段階においては、新型コロナウイルスはまだ問題となっていなかったこともあり、本展の目的は、常設展ではさわってみることができない資料にさわれるようにするという明確なものであった。

同時に、視覚障害者だけを対象とするのではなく、 資料にさわることを通して、様々な人たちに新たな アイヌ文化、あるいは博物館体験をしてもらうことも テーマとした。すなわち、障害者、子どもなどの特定 層を対象とするのではなく、誰もが楽しめる博物館 = ユニバーサル・ミュージアムを目指したのである。な お、本稿で用いるユニバーサル・ミュージアム<sup>1)</sup> は、 国立民族学博物館の広瀬浩二郎准教授らが提唱する前 述の「誰もが楽しめる博物館」という意味合いにおい て使用する。

しかし、コロナ禍によって、さわるという行為自体 が避けられる社会情勢のなかで、さわることを促す展 示を行うことは、その展示の意味、あるいは開催する ことの是非自体が変容するような状況であった。

当館の開館にあたり参考とした新型コロナウイルス 感染拡大予防対策は、公益財団法人日本博物館協会の 「博物館における新型コロナウイルス感染拡大予防ガイドライン」があげられる。同ガイドラインを参考に、 ウポポイ及び当館への入場時のマスク着用、検温、手 指消毒の勧奨、入場の日時指定による事前予約制と入 場制限といった対策を取った。

これらの対策に加えて、本展は会場入口での手指消毒を必須とし、入場者数の制限、展示物や音声ボタンをはじめとした来場者がさわる箇所の定期的な消毒などを徹底した上で開催した。また、会場が約80㎡とコンパクトなうえ、会場出入口が一カ所に限られていたため管理が容易であったことも開催の後押しとなった。

しかしながら、日本博物館協会のガイドラインでは「展覧会の実施に当たって特に留意すべきこと」として、「直接手で触れることができる展示物(ハンズオン)は感染リスクが高いので展示しないことを原則とし、止むを得ない場合は職員が管理して消毒を徹底する。また、屋外展示の場合は、鑑賞者が作品に直接手で触れることのないよう注意喚起や鑑賞方法の工夫を行う」(公益財団法人日本博物館協会 2020: 6)と規定している。コロナ禍においては、「止むを得ない場

合」を除いては、資料にさわる展示は行わないことと されているのである。

こうした状況でも実施した本展からは、どのような 意義が見いだせるかを次節以降で考察する。

## 2.4. 本展示における「さわる」ことの意義と目的

本来、「モノにさわる」という行為は、子どもや視覚障害者のみならず、大人や晴眼者にとっても魅力的であるとともに、意義の大きい行為である。そして、本展のねらいは博物館のあり方そのものを問い直すことにあり、その観点から、みることと同義にさわることやきくことを体験できるようにすることで、特定の世代や属性にかかわらず、「誰もが楽しめる」展示体験の機会創出を目的としたのである。つまりハンズ・オン展示のように、さわることを手段としてその先に教育的ねらいを設定するのではなく、さわること、みること、そしてきくことそのものを体験する機会としたのである。

本展を開催した直後は、来場者の一定の割合で、資料にさわらないまま出て行くということが起こった。あるいは、さわるまでに一定の時間を要することも見受けられた。こうした行動の背景にはどのような理由があるかは追って調査が必要であるが、一般論として博物館・美術館では展示物にはさわってはいけないという前提が浸透しているからとも考えられる<sup>2)</sup>。なお、こうした事態を受けて、会場入口で係員が来場者に向けて展示してある資料にはさわれることをアナウンスするようにした。このことによってまったくさわらずに会場を出て行くといった来場者は減少した。

広瀬によると「ミュージアムとは、視覚優位の近代文明の象徴」であり、「UM 運動は、近代に対する強烈な異議申し立てを内包している」(広瀬 2020a: 134-135)という。そして、ユニバーサルとは、「バリアフリー的な障害者対応とは異なる」とし、「社会の多数派である健常者とミュージアムの関係をどうやって、どこまで変えていけるのかを検討すること」が、「誰もが楽しめる」を具現化することにつながるとしている(広瀬 2021)。

こうした状況で、ユニバーサル・ミュージアムの 「誰もが楽しめる」とは、当館においてはどのような 意味を持ち得るだろうか。そして、当館においてさわ る展示を行う意義はどこにあるだろうか。

当館は、「アイヌ文化を復興・発展させる拠点として、また、将来に向けて先住民族の尊厳を尊重し、差

別のない多様で豊かな文化を持つ活力ある社会を築いていくための象徴」とされているウポポイの中核施設としてある。「多様で豊かな文化を持つ」社会の実現とは、「誰もが楽しめる社会」ということにもなり、広瀬の提唱するユニバーサルと通じる試みであるといえる。したがって、まず資料にさわることを通してアイヌ文化や〈博物館〉を体験すること、さらに物理的にさわることだけではなく、〈博物館〉、ウポポイ体験のあり方、あるいはアイヌ文化自体を今までとは異なる観点から捉えられるような機会とすることを目的とした。

# 3. 本展開催に向けた試みと実践

# 3.1. 博物館と公園の協力による展示の実施

ウポポイは「アイヌの歴史・文化を学び伝えるナショナルセンター」としての「空間」とされている。そしてその主要施設として〈博物館〉と国立民族共生公園(以下、公園)、そして慰霊施設がある。〈博物館〉と公園はポロト湖畔エリアの同じ敷地内にあり、公園内には複数の施設が点在し、それらがフィールドミュージアムとも位置付けられている。

ウポポイに入場すると最初に来場者が認識するのは 〈博物館〉という立地構成になっている。したがって まず〈博物館〉を見学し、その後公園内を見学、散策 するという、ゲートウェイとしての〈博物館〉という 役割もある。そして、ウポポイは展示・調査研究機能 など六つの機能を掲げている。これらの機能をすべて 〈博物館〉、あるいは公園が個別に担えるわけではなく、 機能・役割が異なる両者が結びつくことによって個別 には成し得ない機能を持つのである。

こうしたウポポイにあって、本展に向けて公園との 協力関係のもとに進めた企画がある。

公園との協力は大きく二つに分けられる。一点目は本展で展示する資料の製作で、二点目は会期中のワークショップの実施(【写真 6】、231 頁参照)である。本稿は主に展示についての考察のため一点目の展示資料の製作について論じる。

本展に向けて公園職員のムカラ(山道陽輪)の協力 のもと、ヤラニマ(樹皮の器)を製作し、展示する こととした。ムカラ自身がアイヌ文化の伝承者として 普段から物作りなど様々な伝承活動に携わっており、 現在では作り方が伝承されていないために、残された 資料を調査、研究し、作り方の技術を復元することに も取り組んでいる。なお、そうした技術を活かして、 基本展示室に展示されている「クマつなぎ杭」などの 製作にも携わった。

ウポポイの運営団体である公益財団法人アイヌ民族 文化財団(以下、財団)は、ウポポイの所在する自治 体である白老町と「アイヌ文化伝承等のための森林の 活用に関する協定書」を締結しており、定められた町 有林でアイヌ文化伝承等のための植物素材の採取がで きる。そこで、本展に向けてどのような資料を製作す るかを検討した際には、材料を白老町内で採取できる 資料にすることとした(【写真 4】、230 頁参照)。こ れは、材料の採取から製作しているところまでを一貫 して記録するためであるとともに、上記のような環境 があるからでもあった。そして、ヤラニマ作りは公 園内のチセで行い(【写真 5】、230 頁参照)、こうし た環境も記録、公開することとした。

こうした材料を採取できる環境があり、そこで得た 材料を使ってモノを作れる職員がいること。そして、 作られたモノや記録を展示する〈博物館〉があること は、ウポポイならではの特性である。さらに本展では こうした活動を音と映像によって伝えている。そして 来場者が映像の中で作られている実際のモノを手に 取って、材料の質感や作りの細部について触察するこ とは、アイヌ文化のみならずウポポイの現状に触れる ことにもつながる。こうしたウポポイでの取り組みと、 そのプロセスを公開することは、視覚情報だけを頼り にモノを分類し、並び替える、モノ本意の展示とは異 なる展示につなげることにもなり得る。

# 3.2. 音の展示について

本展では、音を重要な要素として展示した。見ることが主である博物館の展示において、音に注目することは、文化の見せ方、捉え方を異なる角度から提示することになり、ひとつの感覚だけではなく、様々な感覚を同時に使って体験することにつながる³。つまり音を展示することのねらいとしては、第一に音と音に対応する資料を組み合わせて展示することで複合的な捉え方につながること。第二に展示空間を音によってひとつのまとまりとすることで、音とは直接的な関連付けのない資料についても、資料それだけを観察/触察しているのとは異なる、予期せぬ見方にもつながり得ることである。

前述のように音は本展において重要な要素になるため、音の制作を映像・音響作家の春日聡氏に依頼し

た。展示空間では、映像と組み合わせた音の作品を 二点展示した。「私たちのことば」におけるカムイユ カラ(カムイの物語)とウポポ(座り歌)と、映像作 品としての「ウポポイに音でさわる」である。前者は、 アイヌ文化を直接的に表す展示と言える。一方で後者 は、ウポポイのなかで聞こえる電車が走る音や、川や 湖の音、あるいは基本展示室や公園で聞こえる映像の 音や来場者の話し声などから構成されている。実は、 「私たちのことば」の映像中にも微かに来場者の声が 混じっている。これは、ウポポイの開業時間中に録音 したためである。

また、ヤラニマの製作においても、一連の工程を 記録撮影・録音した。アイヌ文化についての技術伝承 などの映像は多く制作されているが、音に注目した記 録はあまり例がないからである。木から樹皮を剥ぐ音 や、樹皮を縫い合わせて器にしていく音などは、文化 を構成する重要な要素である。さらに、それをどのよ うな環境下で行っているかを知るのに、視覚と聴覚で は得られるものが異なる。

一本の作品のなかに複数の要素が入っているため、常時、特定の資料と「映像と音」が対応しているわけではないが、ヤラニマのほか、「私たちの交流」のテーマで展示した模型のチァ(丸木舟)に対応するように、ポロト湖でチァを漕いでいるシーンも収めた。チァの内部に仕込んだマイクが拾った船体と櫂の擦れる音がリアルに響き、湖岸から収録した音は水や風が際立って聞こえる。この展示で、資料と映像、そして音に触れることによって、ウポポイにおけるアイヌ文化を体験できるようにしたのである。

現在のウポポイのあり方を記録し、展示するために、極力環境には手を加えずに録音を行った。静謐なポロトの映像を撮る目的で休業日に撮影したが、現実には公園内を何台もの大型の草刈り機が作業をしていたため、機械音が入り込んでいる。前述のウポポなどを録音する際にも、アイヌ文化だけに注目するのであれば、来場者の声が入らない環境を選ぶべきであるが、そのようなことは行わなかった。展示空間でこうした音が聞こえることは、聞く側の聞きたいものとは異なる音を流すことになるかもしれない。しかし、現在のウポポイのあり方に触れてもらうためにもあえてこのような手法をとることにしたのである。

なお、「ウポポイに音でさわる」の展示には、映像 モニターのスピーカーを使わず無指向性のスピーカー を用いることによって、より「自然な音」に近い環境 の再現を試みた。

#### 3.3. 資料の性質と展示構成

本展の展示資料は、教育教材と、本展に向けて製作 したもの、そしてこれら以外の用途で製作されたもの で構成した。このため、収蔵資料や他館から借用し た資料などは展示していない4)。教育教材については、 アイヌ文化伝承者に製作を依頼した資料、あるいは旧 アイヌ民族博物館で複製事業として製作した資料など であり、同様な来歴を持つ資料が基本展示や特別展示 でも展示されている。また、本展に向けて製作した資 料については、前述のようにウポポイの職員自身が アイヌ文化の伝承者ということもあり、文化伝承の意 義も込めて資料を製作したのであり、そのプロセスを 記録・公開することにも意義があるといえる。そして、 これ以外の用途で製作した資料としては模型のチッが あげられる。公園で実際に使うチッを作るための試作 として作られたものであるため、実際のチプの形状に なっており、製作時の試行錯誤した形跡も感じること ができる。製作者であるムカラは、作る過程での木の わずかな凹凸は見てもわからないが、さわってみると わかることがあると言い、それを「手で見る」という 言葉で表現している。これはさわらなければわからな い感触であり、こうした資料を展示することの意義で もある。したがって、当館及びウポポイが持つ機能な どに照らし合わせれば、収蔵資料以外の複製品や職員 自身が製作した資料を展示することにも大きな意義を 見出せる。

展示した資料の詳細は「付録:開催概要(3)展示 資料一覧」の通りであるが、前述した資料群により展 示を構成した。一方で、6テーマに即した資料を展示 することが本展の趣旨だったため、各テーマを資料で 特徴付け、差異を生むにはどのような資料がよいかが 検討された。展示する資料点数が少ないために、各 テーマに見合った資料一点から二点を担当者が選定す る際にも、各資料の選定意図をより明確にする必要が あった。しかし、ほとんどの資料が民具資料であるた めに素材や形状が似ているものがあり、各テーマの差 異が明確にならないことも考えられた。また、ある資 料がどのテーマに即しているかは、展示のコンセプト によるところが大きく、例えば、基本展示ではアイヌ 文化を構成する要素として6テーマを立て、この点 からマキリ(小刀)を「プラザ」、「私たちの世界」、 「私たちのしごと」で展示しているが、「私たちのくら

し」で展示することもコンセプト次第では可能である。 一方で、こうした各テーマの差異を本展の趣旨である さわることから見いだそうとした場合、基本展示のコ ンセプトとは一致しない場合もあることが検討の過程 で明らかになった<sup>5)</sup>

したがって、各テーマとの関連付けとともに、さわることとそこで感じる差異に着目し、各資料の素材の違いや、刺繍がほどこされているものと、彫刻がほどこされているものといった違いが明確になる資料を展示することとした。

# 4. おわりに

本展では、入口の「ごあいさつ」パネルを含めて、すべての展示台に音声解説を設置した。加えて、「私たちのことば」の映像(カムイユカラとウポポ)と映像作品「ウポポイに音でさわる」がループ再生されていた。このため、音声解説が複数台でプレイされているときは音が混線してしまい、個々の解説が聞き取りにくい状況が発生することがあった。音の展示は展示室の状況に応じて構成を調整するなどすれば改善される可能性はあるものの、音声解説自体は設置する数に応じてこのような問題が起こることが避けられない。こうした音が混じり合ってしまう問題は音の展示では博物館や美術館において以前から指摘されている問題なので(加藤 2003: 30)、他館の展示環境なども調査していく必要がある。

当館及びウポポイの存在意義に照らし合わせれば、必ずしも収蔵資料を展示することだけが博物館としての展示に対する価値付けとはいえないのは前述した通りであるが、こうした点も加味してさわる展示においてどのような資料を展示するべきかについては今後議論されていくべきであると考える。さらに、今回の展示では資料点数を十三点としていることによって、来館者が見たいものを見られなかった可能性が考えられる。来館者が主体的に選択して展示を見ることが望まれる(島・土屋・佐々木 2021: 40)状況においては、規模も含めてどのような展示を行っていくべきかが今後の課題としてあげられる。

そして、本展を一過性の取り組みとするのではなく、 基本展示や特別展示での試みにも広げていき、博物館 として一体的に展開させていくことが望ましい。した がって、当館としてさわる展示、あるいはユニバーサ ル・ミュージアムの活動を継続させ、その先にどのよ うな博物館像を描くのか議論する必要がある。

# 付録:開催概要

本展の開催報告として、展示の構成・特徴から、準 備段階や関連イベントの様子についてまとめる。

- ・タイトル:第1回交流室展示 「ケレヤン、ヌカラヤン、ヌヤン さわる、みる、きく、国立アイヌ民族博物館」
- ・会期:2021年8月21日(土)~10月3日(日) \*当初の会期は9月12日(日)までとしていたが、新型コロナウイルス感染拡大による緊急事態宣言の発令に伴い、当館は8月31日(火)から9月30日(木)まで臨時休館となった。そのため会期を10月3日(日)までに変更した。なお、こうした事態を受けて、冬期間に第2期として本展を再度開催することで調整を進めている(2021年10月末日現在)。
- ・会場:国立アイヌ民族博物館 交流室 B
- ・主催:国立アイヌ民族博物館
- ・協力: 苫小牧市社会福祉協議会、苫小牧身体障が い者福祉連合会、苫小牧市点訳赤十字奉仕 団
- ・音・映像:春日聡(映像・音響作家、映像人類学 者、国立歴史民俗博物館 客員准教授)
- ・観覧料:無料
- ·来場者数:1,623名
- ·本展担当者

シナリオ主担当:立石信一(歴史社会グループ) 副担当:宮地鼓(物質文化グループ) 押野朱美(教育グループ)、カサド・パ ルド・ケラール(教育グループ)、今野 彩(教育グループ) \*展示企画室主担 当:小林美紀(言語儀礼芸能グループ)、 副担当:劉高力(言語儀礼芸能グループ)

# (1) 展示の構成

本展は、基本展示をより理解し、体感する機会とするために、基本展示の6テーマ展示に即した展示構成とした。

本展では一テーマについて一点から二点の資料を展示した。展示資料は、教育教材資料、本展に向けて製

#### 私たちのくらし

衣服、食、住まいをはじめ、音楽や踊りなど、伝統的なくらしに関する道具や文化を整本展示室では協介しています。木の皮の繊維で作る衣服については、その素材となるオヒョウの皮剥ぎから糸づくり、そして実際の道具も展示しています。また、人の一生のなかで行われるさまざまな優礼の様子や、子どもたちの遊びにも触れながら、アイ文化の特色や地域の差も紹介しています。そして、古い恋優から伝統的な踊りを復活させようと取り組みも展示しています。

#### Our Lives

The permanent exhibition room introduces tools and culture related to traditional lifestyle such as clothes, food, housing, music and dance. Regarding clothing made from bark fibers, the process of obtaining the material - from the peeling of the bark of the Manchurian elm, to the creation of the thread - is displayed alongside the actual tools used to make the clothes. The exhibition also introduces the key characteristics of Ainu culture and regional differences by focusing on the various fituals that take place in a person's life and children's play. Also on display are the efforts of people involved in cultural transmission trying to revive traditional dance from old memories.



#### 図1 テーマの解説文の一例「私たちのくらし」

作した資料、そのほかの用途で製作された資料により 構成した。展示資料は自由にみたり、さわったりでき るように、テーマごとの展示台に展示した。このほか、 各展示台にはそれぞれのテーマの解説文も設置した (【図1】)。また、さわる資料の展示だけではなく、音 や映像による展示も行った。

以上のように、本展全体で「さわる」「みる」「き く」など様々な感覚を使って展示を体験・体感できる ような構成とした。

## (2) 展示の特徴

前項のとおり、展示の構成においては、来場者に基本展示の6テーマ展示の理解を深め、アイヌ文化をより体感してもらうことを目的とし、6テーマに即して、さわる資料とテーマの解説文を設置した(【写真1】)。本項では具体的な展示の内容と、どのような方法を用いて展示を行ったのかについてまとめる。



写真 1 会場の様子 (2021年9月30日カサド・パルド撮影)

#### 1) 資料にさわってアイヌ文化を感じる

6テーマのうち「世界」「くらし」「歴史」「しごと」「交流」では、資料を一点から二点展示した。例えば「しごと」で展示したマキリ(小刀)とイタ(盆)にほどこされた精巧な木彫りは、みることだけではなくさわることでその技術を感じることができる。

また「歴史」で展示したチェフケレ(サケ皮のくつ)は、さわったりにおいをかいだり、視覚以外の感覚でもサケ皮を感じることができる(【写真2】)。このように資料にさわることで、資料の細かな装飾や材質を感じ取ることができる。



写真 2 チェプケレをさわる様子 (2021 年 10 月 2 日カサド・パルド撮影)

# 2) 音と映像で感じるウポポイ

「ことば」の展示では、鵡川地域のカムイユカラ(カムイの物語)とウポポ(座り歌)を映像で紹介した。映像には、歌い手がチセ(家)の囲炉裏端でうたう姿がおさめられている。歌い手は、当館職員の押野朱美と公園職員の秋山里架である。両者とも鵡川出身で、実際に受け継いだカムイユカラとウポポを演じた。以上より、音と映像を通して、現在に語り継がれているアイヌ語に触れられるような展示を試みたのである。

このほか、公園や〈博物館〉にある様々な「音」を 収録した映像作品「ウポポイに音でさわる」を会場内 で上映した。映像作品は公園や〈博物館〉にある多様 な音に注目し、様々な角度からウポポイやアイヌ文化 に触れられるような作品を制作した。

# 3) 多言語と音声による「ごあいさつ」

会場入口に「ごあいさつ」パネルを設置した。あい

さつ文は、アイヌ語・日本語・英語・中国語・韓国語の多言語で表記した。日本語のあいさつ文には、日本語の文章を点訳した点字シールを貼り付けた。また、館長の佐々木史郎がアイヌ語・日本語であいさつ文を読み上げた音声解説(ボタンを押すことで音声が流れる仕組み)も設置した。これはウポポイの第一言語と位置付けられているアイヌ語を、音声資料の展示ではなく、館長の「あいさつ」として来場者に聞いてもらうことを目的に設置した。アイヌ文化の復興・発展を目指す当館の理念を体現する一機会となったのではないだろうか。6)。

#### 4) 会場案内の設置

会場入口付近に「会場案内」を設置した。会場案内では「会場マップ」「6テーマの展示の見方」「展示の楽しみ方」を表示した(【図2】)。会場案内は文字による案内だけではなく、音声解説も設置した。音声解説では「展示台の正面に解説文を置いている」、「展示台の正面右側に音声で解説を聞くためのボタンがある」、「展示台の中央に資料を展示している」ことを案内した。

## 5) 点字と音声解説

会場にあるすべての解説には点字や音声解説を設置 した。点訳は、苫小牧市点訳赤十字奉仕団の協力を得 た。解説やキャプション、会場案内など、会場で掲示 していたほぼすべての日本語の点訳を行い、各所に点 字シールを貼り付けた。点字シールは、同奉仕団と本



図2 会場案内

展の担当者が打ち合わせを行い、内容を検討しながら 作成した。このほか、点字のみを使用した「点訳パン フレット」(紙製) も作成した。点訳パンフレットは、 あいさつ文・会場案内・6テーマ展示の各テーマの解 説文を点訳したものを7枚1セットにして配布物と した。

音声解説は、各展示台に設置した(【写真 3】)。音 声解説ボタンを押すことで音声による説明が流れる仕 組みである。音声は、当館の職員がすべて日本語で吹 き込みをした。音声解説の内容は、基本的には解説を 読み上げたが、音声で聞いたときに聞きやすい順番や 時間を考慮した内容に再編し、録音した。



写真 3 「音声解説ボタン」を押す様子 (2021 年 10 月 2 日カサド・パルド撮影)

# 6)「アイヌ文化学習トランク」紹介コーナー

財団の「アイヌ文化学習トランク」は、伝統的な衣服や工芸品、民具などの資料をセットにした貸出用のキットである。トランクの中身はすべてさわったり、使ったりすることができる。財団が使用を希望する団体にトランクの貸し出しを行っている。本展の会場でもトランクの資料をいくつか展示した。

# 7) ユニバーサルデザインを取り入れた構成

ユニバーサルデザインとは、国籍や年齢、障害の有無にかかわらず多様な人々が使いやすいように製品・環境をデザインする考え方である<sup>7)</sup>。本展ではユニバーサルデザインを取り入れることとし、今回は特に展示にかかわるグラフィックデザインで色とフォントを検討した。

色を識別する感覚(色覚)は様々なタイプにわけられる。どの色覚のタイプでも判別できるような色の使い方がされているデザインを、カラーユニバーサルデザインという(教育出版 CUD 事務局 2012: 10)<sup>8)</sup>。

本展では、前述のとおり基本展示の6テーマ展示に 即した展示構成を取ったが、チラシや会場で使用する 配色は、多様な色覚のタイプでも見分けがつくように 6テーマ展示のシンボルカラーを踏襲しながら調整し た(【図3】)。

チラシや解説文、会場案内などで使われる文字には、 ユニバーサルデザイン書体の「A-OTF UD 新ゴ NT Pro」(モリサワ社)を使用した。



図3 6テーマ展示の色彩調整

# 8) 衣服と触図

伝承者が複製した刺繍が施された木綿の衣服を本展では展示した。刺繍がほどこされた衣服は、ほとんどの場合、展示ケース越しに鑑賞することが多い。したがって、本展では衣服を直接手に取って刺繍をじっくりとさわり、確認することができるようにした。また、

衣服や刺繍の全体像を把握できるように、小さく図式 化した触図を作成し、特殊プリンタ・用紙で出力し、 配布物とした。

# (3) 展示資料一覧

本展の展示資料は【表1】のとおりである。

## (4) 展示に向けての準備

本展の開催にむけて、事前の打ち合わせや準備、作品の制作活動を行った(【表 2】~【表 4】)。

# (5) 関連イベント

本展の期間内に関連イベントを 4 件企画した。 8 月 に開催を計画した 2 件は実施したが、9 月に開催予定 の 2 件(ワークショップ「さわる、みる、きく、そしてはなす」、ユニバーサルミュージアム & パーク「民具をつかってみよう!」)は、緊急事態宣言の発令による臨時休館のため開催中止とした。

# 1) 講演会「未開の知」に触れる――ユニバーサル・ ミュージアムとは何か――

講師に国立民族学博物館の広瀬氏を招いた講演会を、 会場・オンライン配信で開催した。新型コロナウイル

表1 展示資料一覧(13点、映像含む)

テーマ	種類	展示資料名(アイヌ語、日本語)	備考
ことば	映像	カムイユカラ	語り手 押野朱美
	鵡川のカムイユカラ「火のカムイの物語」		映像・音源制作 春日聡
	映像	ウポポ	歌い手 押野朱美 秋山里架
		鵡川のウポポ(座り歌)	映像・音源制作 春日聡
世界	資料	エムシアッ 刀掛帯	
くらし	資料	チシポ 針入れ	
	資料	ヤラ ニマ 樹皮の器	製作 ムカラ(山道陽輪)
歴史	資料	チェプケレ サケ皮のくつ	
しごと	資料	マキリ 小刀	
	資料	イタ 盆	
交流	模型	チプ 丸木舟(模型)	製作 ムカラ(山道陽輪)
全体	映像	ウポポイに音でさわる(43 分 30 秒)	映像・音源制作 春日聡
	資料	衣服(木綿) * (2)8)で詳述	
	触図	衣服(木綿) * (2) 8) で詳述	
	資料	「アイヌ文化学習トランク」	

# 表 2 春日聡氏滞在 音と映像の録音と設営

日程		作業内容
2021年	7月29日(木)~8月6日(金)	音と映像の収録(写真 4、5)
	8月19日(木)~8月21日(土)	展示作業



写真 4 町有林での作業の様子 (2021年8月3日立石撮影)



写真 5 製作の様子 (2021 年 8 月 3 日立石撮影)

# 表 3 苫小牧市社会福祉協議会、苫小牧市点訳赤十字奉仕団 打ち合わせ日程

日程		内容	会場
2021年	6月2日(日)10:00~11:00	- - 点字シール・点訳パンフレ - ット制作の打ち合わせ	苫小牧市社会福祉協議会
	7月28日 (水) 13:00~15:00		
	8月6日(金)11:30~12:00		
	8月12日 (木) 13:30~14:30		
	8月18日 (水) 13:30~14:00	-	

# 表 4 苫小牧身体障がい者福祉連合会 打ち合わせ日程

日程		内容	会場	
2021年	7月28日 (水) 15:00~15:30	本展の説明と協力依頼	- 苫小牧市福祉ふれあいセンター	
	8月6日(金)13:30~14:00	展示台等について相談		

ス感染拡大の影響により、接触することやさわることがマイナスに捉えられている現在において、さわる展示を開催することの意義について話された。また、広瀬氏が10年以上に渡り活動してきたユニバーサル・ミュージアムについても触れられ、「ユニバーサル」に対する考えが深まる講演となった。

·講師:広瀬浩二郎氏(国立民族学博物館准教授)

· 開催日時: 8月21日(土) 13:30~14:30(会

場:当館 1 階 交流室 A)

・参加者数:42名

# 2) ユニバーサルミュージアム & パーク「音楽を体験してみよう!」

「音楽を体験する」をテーマに、公園と連携して企画したイベントである。参加者は、司会進行役の演奏・歌をききながらリズムを取ったり、楽器のムックリ (口琴) やトンコリ (弦楽器) に実際にさわったり、じっくり観察するなど、「きく」「さわる」「みる」ことを通して音楽にふれた。また、エント茶を参加者に提供し、音楽を体験するだけではなく、味覚や嗅覚な



写真6 ユニバーサルミュージアム&パーク 「音楽を体験してみよう! | 様子 (2021 年 8 日 28 日室地撮影)

ど様々な感覚を使ってアイヌ文化に触れるイベントと なった。

·開催日時:8月28日(土)13:00~14:30 (会

場:伝統的コタン ポンチセ)

·参加者数:20名

·司会進行:押野朱美、石田慈久恵

#### 注

- 1) ユニバーサル・ミュージアムという用語は和製英語であり、「21世紀 に入るころから、『人に優しい博物館』の含意」(広瀬 2020: 136) で用 いられるようになったという。また、吉田によると、英語由来のこの 語は、英語では「universal survey museum, つまり世界全体を俯瞰し 探究するミュージアムをさし、(中略) 世界をカヴァーする総合博物館・ 美術館を | 指すという (吉田 2021: 3)。
- 2) 資料にさわらないという傾向は、他の博物館でも報告されている。「展 示物に積極的にさわろうという人はそれほど多くなく、特に大人ほど 資料にさわらない傾向があるようだ」(黒澤 2021: 194)。
- 3) サウンドスケープを展示に導入することは、「単に視覚に替わる聴覚の 特権化を有効とするのではなく、ミュージアムにおける総合的な体験 性を重視することにより、ミュージアムにおける音の活用可能性を示 唆するもので」(寺田 2021:54) もあるという。
- 4) アイヌ文化学習トランクについては、ウポポイの運営主体であるアイヌ 民族文化財団が製作・管理し、貸し出しを行っている。
- 5) 広瀬は、国立民族学博物館の資料をもとに「世界の各地域の特徴を手 触りにより探究・分類」の調査を行い、展示に反映する予定だったと いう (広瀬 2020b: 20)。
- 6) 館長のアイヌ語あいさつ文収録にあたっては、京都大学河原達也教授 より参考資料としてアイヌ語合成音声をご提供いただき、札幌学院大 学奥田統己教授より発音のご指導をいただいた。
- 7) 提唱者のロナルド・メイス(Ronald L. Mace, 1941-1998)によるユニ バーサルデザインの原則

"Universal design is the design of products and environments to be usable by all people, to the greatest extent possible, without the need for adaptation or specialized design. — Ron Mace" (ユニバーサル デザインとは、すべての人が可能な限り最大限利用することのできる 製品や環境のデザインであり、人が適応を迫られたり、特殊なデザイ ンを必要とすることのないものである。 — ロナルド・メイス)

The Center for Universal Design. Universal Design Principles: About

https://projects.ncsu.edu/ncsu/design/cud/about\_ud/about\_ud.htm (2021年10月29日閲覧)

8) カラーユニバーサルデザインのポイントとして「できるだけ多くの人 に見分けやすい配色を選ぶ | 「色を見分けにくい人にも情報が伝わるよ うにする | 「色の名前を用いたコミュニケーションを可能にする | の3 つがあげられる(教育出版 CUD 事務局 2012: 14)。

# 参考文献

今村信隆 編著 2017 『博物館の歴史・理論・実践 1 ― 博物館と いう問い』京都造形藝術大学 東北芸術工科大学 出版局 藝 術学舎。

大堀哲 編著 1997『博物館学教程』東京:東京堂出版。

- 加藤修子 2003「博物館における『音の展示』と『音による環境づ くり』:全体報告と館種別比較分析およびレベル別分析」『文化 情報学:駿河台大学文化情報学部紀要』10 (1):29-54
- 教育出版 CUD 事務局 編著 2012『カラーユニバーサルデザインの 手引き」東京:教育出版株式会社。
- 黒澤浩 2021「『さわる展示』の意義と苦悩 ― 南山大学人類学博 物館の実践から — 」広瀬浩二郎編『ユニバーサル・ミュージ アム – さわる!"触"の大博覧会』pp.194-197、京都:合同会 社 小さ子社。
- 公益財団法人アイヌ民族文化財団「アイヌ文化学習トランク」 https://www.ff-ainu.or.ip/web/application/lending/details/ ainubunka\_gakushu\_tr.html (2021年10月21日閲覧)
- 公益財団法人日本博物館協会「博物館における新型コロナウイルス 感染拡大予防ガイドライン | (令和2年9月18日) https://www.j-muse.or.jp/02program/pdf/200918setgaid3.pdf (2021年10月31日閲覧)
- 公益財団法人日本博物館協会「博物館における新型コロナウイルス 感染拡大予防ガイドライン」(令和3年10月14日) https://www.j-muse.or.jp/02program/pdf/jam\_covid\_ guideline\_20211014.pdf (2021年10月31日閲覧)
- コールトン、T. 2000『ハンズ・オンとこれからの博物館 ンタラクティブ系博物館・科学館に学ぶ理念と経営』染川香澄、 井島真知、徳永喜昭、芦谷美奈子、竹内有里訳、平塚: 東海大 学出版会。
- 島絵里子、土屋順子、佐々木とき子 2021 「科学博物館における「さ わる展示 | を紹介する点字冊子の作成と課題 - 視覚障害者へ 開かれた博物館への取り組み」『日本ミュージアム・マネージ メント学会 研究紀要』25:39-47
- The Center for Universal Design. Universal Design Principles: About UD

https://projects.ncsu.edu/ncsu/design/cud/about\_ud/about\_ ud.htm (accessed October 29, 2021)

- 仙波愛、小川正賢 2000「科学博物館のハンズ・オン展示思想の原 点を探る フランク・オッペンハイマーの思想とエクスプロラ トリウムの理念」『日本科学教育学会研究会研究報告』14(5):
- 寺田鮎美 2021「ミュージアムと音 ~聴覚によるミュージアム体 験の新たな可能性に関する一考察~ | 『日本ミュージアム・マ ネージメント学会 研究紀要』25:49-55。
- 広瀬浩二郎 2016『ひとが優しい博物館:ユニバーサル・ミュージ アムの新展開』東京:青弓社。
- 広瀬浩二郎 2020a『触常者として生きる ― 琵琶を持たない琵琶 法師の旅』東京: 伏流社。 2020b『それでも僕たちは「濃厚接触」を続ける! 世界の感 触を取り戻すために』京都:合同会社 小さ子社。
- 広瀬浩二郎 2021「『ユニバーサル・ミュージアム』 な仲間たち 1 あの手この手で博物館を開く」

『点字毎日活字版』 2021 年 4 月 22 日

文化庁「国立アイヌ民族博物館展示計画」(平成 28 年 5 月) https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/ainu/museum\_ tenjikeikaku/pdf/tenjikeikaku.pdf (2021年10月18日閲覧)

- 吉田憲司 1999『文化の「発見」 ― 驚異の部屋からヴァーチャル・ ミュージアムまで(現代人類学の射程)』東京:岩波書店。
- 吉田憲司 2021「ごあいさつ」広瀬浩二郎編『ユニバーサル・ミュージアム さわる!"触"の大博覧会』pp.3·5、京都:合同会社 小さ子社。
- 渡邊 智大 2016「ハンズ・オン展示の成立と定義の研究動向」『國 學院大學博物館學紀要』 40:171-180。